

## 点から線、線から面での野生動物管理

文：柳川 久（「野生生物と社会」学会理事・帯広畜産大学）

きつかけはカエルだった。大雪山国立公園内のある地「点」で、エゾアカカエルの交通事故が多発していた。現地調査によって、その一因が車道と歩道の間にあるカエルが乗り越えられない段差であると判った。そこで道路管理者の北海道開発局に向き、協議の結果、段差をカエルが越えられるスロープにしていた。

当時は事故多発力所をポイントでとらえていて、その場その場で事故対策を考えていた。しかし、そのうち事故多発の場所は、人の道路と動物の移動経路が交差する場所という、当然すぎる事実気がついた。つまり「線」と「線」が交わる場所である。この考えを基に、帯広市で多発するエゾリスの交通事故対策に、リスの通り道を考慮したオーバブリッジの場所設定を提案した。また、道路建設時に動物の移動経路分断が想定されるケースの対策として、エゾモモンガの滑空用ポールやコウモリ類が通過できるトンネルを作ってもらい、それらの利用も確認されている。

これらの中・小型動物用対策を考えているうちに、今度はシカ・クマなど大型動物の移動経路をどうするかという問題が生じてきた。彼らも重要な生物多様性の構成要素である反面、人間やその生産物を害する動物でもある。その移動経路を確保しつつ、農業被害などを抑えるためには、動物と人間の双方の土地利用を「面」でとらえる必要性がある。この考えを基に、移動した動物が周辺の農耕地などに出て行かないよう大型動物用通路を作っていた。幸いな事に、シカは頻繁に通路を利用しているが、その周辺での農業被害や交通事故は起こっておらず、まずは成功だったかなと、胸を撫で下ろしている。



写真は、この7月に札幌で開催されたIWMCの後にドイツやカナダなどの専門家と行なった視察の記念撮影。シカなどの大型動物用の移動経路（更別村）にて（最前列左から2番目が著者）